



Title	比較文の条件
Author(s)	大坪, 喜子
Citation	長崎大学教育学部人文科学研究報告, 23, pp.25-36; 1974
Issue Date	1974-03-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/32388">http://hdl.handle.net/10069/32388</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-03-20T15:59:12Z

比較文の条件<sup>1)</sup>

大坪喜子

“Conditions on Comparatives”

Yoshiko Ōtsubo

〔0〕 たとえば、次の比較文において、

- (1) The table is longer than it is wide.
- (2) \*The table is longer than it is short.
- (3) \*The table is shorter than it is narrow.

(1)は正しい文であるが、(2)(3)は受け入れられない文であるという。また、次の文においては、

- (4) The man is more unhappy than he is happy.
- (5) The man is richer than he is poor.
- (6) \*The man is more unhappy than he is poor.
- (7) \*The man is happier than he is rich.
- (8) \*The man is poorer than he is rich.

(4)(5)だけが特殊な場合に受け入れられ、他の文は受け入れられないという。また、このような比較をするのはおかしい、と自国語話者は言う。しかしながら、これまで、どうして(1)が正しく、(2)(3)が受け入れられない文であるのか、また、(4)(5)が特殊な場合にのみ認められ、他は受け入れられない文であるのか、説明されていない。以下、ここでは、このような問題に焦点をあてて、比較文の成立のための条件について考えてみたいと思う。上例については、のちほど検討することにして、まず、次の例からみてゆくことにしよう。

〔1〕 次の文において、

- (9) John is taller than Bill.
- (10) ?John is taller than the cat.
- (11) John is heavier than the rock.
- (12) Men are more problematic than machines.
- (13) \*The boy is sadder than the book.
- (14) \*The committee meeting is longer than the table.

まず、(9)は正しい文である。変形文法理論の知識を借りるなら、(9)の文には、その根底に次の2つの文があると考えられる。

- (9) a. John is tall.  
b. Bill is tall.

この考えかたに従うと、(9)については、John も Bill も tall であるという前提があると解釈できることになる。あるいは、少なくとも、John と Bill に関しては、tall という特性が認められると考えてよいであろう。しかし、ついであるが、この文に even<sup>2)</sup>を用いて、(15)のように表わすこともできるが、

- (15) a. Even John is taller than Bill.  
b. John is even taller than Bill.  
c. John is taller than even Bill.

これらの文については、およそ次のような解釈があたえられることになる。

- (16) a. John is taller than Bill.  
b. Other people are taller than Bill.  
c. One would not expect that John is taller than Bill.  
One would expect that John is not taller than Bill.

つまり、(9)と同じ構成要素を備える文でありながら、(15)は、John と Bill が必ずしも tall という特性を備えていることを表現している文ではないことになる。

(10)は受け入れられない文である。(9)との違いは、(9)の文の Bill の位置に the cat があらわれているだけである。(9)は正しい文であるのに、なぜ、(10)はおかしな文となるのであろうか。おそらく、次のような説明を与えることができるであろう。すなわち、John について、John is tall. ということは正しい表現であるが、the cat について、? The cat is tall. とは、通常、用いない表現である。このため、(10)はおかしな文となっているといえることができる。しかし、the cat と呼ばれるものが、ある特殊なもの、たとえば実物より大きく作られ、人間と同じ位の大きさの宣伝用の猫の看板であるという場合なら、この比較文は受け入れられることになる。つまり、The cat is tall. が経験的世界で受け入れられるなら、正しい文となるといってよい。

(11)では、John と the rock とが、その重さについて比較されているが、この文において、その根底にあると考えられる2つの文、すなわち、John is heavy. The rock is heavy. は、それぞれ正しい文である。したがって、(11)は受け入れられる文となっているといえることができる。(12)についても、まったく同様に考えられ、その根底にあると考えられる2つの文、すなわち、Men are problematic. Machines are problematic. がそれぞれ受け入れられる文であるため、(12)は受け入れられる文となっているといえることができる。

一方、(13)(14)は受け入れられない文である。(13)では、the boy と the book について、sadness の程度の比較がなされていることになる。そして、その根底にあると考えられる2つの文、すなわち、The boy is sad. The book is sad. はいずれも正しい文である。にもかかわらず、(13)は非文となっている。これまで、比較文の根底にあると考えられる2つの文が受け入れられる文であるなら、その文は正しい文となると述べてきた、われわれの立場は破られることになるのであろうか。(14)についても、(13)と同様なことが

認められる。すなわち、その根底にあると考えられる2つの文、*The committee meeting is long. The table is long.* は、いずれも正しい。にもかかわらず、(14)は受け入れられない文となっている。このような事実から、われわれは、比較文の根底にあると考えられる2つの文が正しい文であるということは、比較文の成立のための必要条件ではあるけれども、じゅうぶんな条件ではない、ということ認めなければならないことになる。

ここで、正しい比較文(9)と受け入れられない比較文(10)について、もう一度考えてみることにしよう。(9)において、*John is tall. Bill is tall.* が正しく、しかも、比較文としても正しいものとなっているのはなぜか。一方、(10)において、*John is tall. ? The cat is tall.* のように、根底にあると考えられる2つの文のうちの一つが受け入れられない場合、比較文は、いったいなぜ成立しないのであろうか。*The cat is tall.* の *The cat* が特殊な猫をさし、それが人間である *John* と比較されているという場合であるのなら、(10)は正しい文となる、と述べたが、これは、いったい、何を意味することになるのか。これらのことについては、およそ、次のように考えることができるであろう。(9)において、*John is tall. Bill is tall.* が正しく、それらが同時にまた、正しい比較文を生成するということは、*John* と *Bill* とが *tallness* という特性を共に備えていることに由来するということができる。すなわち、*John* と *Bill* とが共通の特性、*tallness* を備えているため、その共通の特性について比較されることができる。一方、(10)においては、*John* と *the cat* とが、*tallness* という共通の特性について比較できない関係にある。つまり、*the cat* には、*tallness* という特性が備わっていないと考えられるからである。この場合、*the cat* が *tallness* を備えていれば、当然、その比較文は成立することになる。同様にして、(11)が正しい文であるのは、*John* と *the rock* とが共通の特性 *heaviness* を備えていると考えられるからである。(12)についても同様に考えられる。すなわち、*Men* と *Machines* には *Problematicness* という特性が認められ、その共通の特性について比較がなされているのである。したがって、(11)(12)は正しい文となっている。

しかるに、問題の(13)(14)についてはどうであろうか、(13)の *The boy is sad.* と *The book is sad.* とは、一見したところ、*sadness* という共通の特性について比較されているように思われる。しかしながら、人間である *the boy* が *sad* であるのと、物である *the book* が *sad* であるのとは、同じ特性であるということができようか。ここで連結詞 *and* を用いて、テストを試みよう。もしも、それらが同じ特性であるなら、上述の比較文の例の場合と同様に、それぞれ、連結詞、*and* を用いて、正しい文ができるはずである。

- (9)′ *John and Bill are tall.*  
 (11)′ *John and the rock are heavy.*  
 (12)′ *Men and machines are problematic.*  
 (13)′ \**The boy and the book are sad.*

しかし、(13)′は受け入れられない文である。したがって、(13)の *sad* については、*The boy is sad.* におけるのと、*The book is sad.* におけるのとでは性質がことなるということ認めなければならなくなる。(14)についても(13)とまったく同様に考えられる。(14)の、*The committee meeting is long.* と *The table is long.* には、表面上、*longness* と

いう共通の特性が認められるように思われるが、この例についても、連結詞 **and** によるテストを用いると、次のような受け入れられない文となる。

(14)′ \*The committee meeting and the table are long.

したがって、この2つの文で用いられている *longness* は、性質がことなるということをも認めなければならなくなる。

以上、比較文が成立するためには、比較文の根底にあると考えられる2つの文が正しい文でなければならないということ、そして、その2つの文は共通の特性を備えていなければならないということ述べてきたことになる。

〔Ⅱ〕 以上のような比較文の成立のための条件は、日本語の比較文にも適用されるように思われる。たとえば、次の例について検討してみることにしよう。

(17) 太郎は次郎より背が高い。

(18) ?花子は百合の花より美しい。

(19) \*太郎は百合の花よりハンサムだ。

(20) \*花子はルビーの指輪よりハンサムだ。

(17)は正しい文である。(18)は少しおかしな文に思われるが、受け入れられる場合がありそうに思われる文である。(19)(20)は、ふつうの日本人の表現には、おそらくみられない文である。それでは、いったい、なぜ(17)が受け入れられる文であり、(18)が少しおかしな文であり、(19)(20)が受け入れられない文であるのか。

(17)の文には、その根底に次のような2つの文があると考えられる。

(17) a. 太郎は背が高い。

b. 次郎は背が高い。

(17)(a)では、太郎は「背が高い」という特性を備えており、(b)では、次郎が同じく「背が高い」という特性を備えていることを表わしていることになるが、この特性が同じ性質の特性であるかどうかを調べるために、われわれは、これらの文に、連結詞「と」(**and**)を用いたテストを用いることができる。その結果、次のような文が生成され、これは受け入れられる。

(17)′ 太郎と次郎は背が高い。

したがって、(17)は比較の対象となっている太郎と次郎とは、共通の特性を備えているため、比較文が成立しているといえることができる。

(18)の文には、次のような文がその根底にあると考えられる。

(18) a. 花子は美しい。

b. 百合の花は美しい。

いずれも正しい文である。そして、(a)(b)にみられる「美しい」という特性は、ここでは、同じ性質であるといってよい。したがって、(a)(b)を連結詞「と」を用いて一つの文にすると、受け入れられる文となるはずである。

(18)' ?花子と百合の花は美しい。

しかしながら、(18)'は(18)と同じく、少しおかしな文に思われるであろう。ここで、その理由について考えてみよう。まず、(18)について言うと、(19)がおかしな文であると思われるのは、花子という人間と、百合の花とが、その美しさにおいて比べられているところにある。

われわれは、ふつう、「花子は春子より美しい」というような比較文を用いる。すなわち、同じ特性を備える人間、たとえば、ここでは女性どうしの間で比べられるのがふつうである。また、(18)について、少しおかしな文に思われるが、受け入れられる場合がありそうな文である、と述べたが、それは、花子という人の美しさを強調するために、比喩的にそのような表現が用いられそうに思われるという意味である。しかし、やはりおかしな文に思われるのは、そのような場合、日本語では、「花子は百合の花におとらず美しい」とか、「花子は百合の花のように(ごとく)美しい」という比較文の形式が用いられるのがふつうであり、「花子は百合の花より美しい」という比較文の形式は用いられないためであるといつてよいであろう。ついでながら、「より」を用いた形式は、古い日本語の表現に見い出されないこともないが、その例は数少ないという。<sup>3)</sup>

(19)の文には、その根底に次のような2つの文があると考えられる。

- (19) a. 太郎はハンサムだ。  
b. \*百合の花はハンサムだ。

(a)は正しい文であるが、(b)は受け入れられない文である。(b)が受け入れられない文となっているのは、「百合の花」と「ハンサム」とが共起する関係ではないからである。「ハンサム」は、人間の、特に、男性について用いられる語である。(a)の文では、太郎という男の人の特性を表わし、したがって、正しい文となっている。(19)については、連結詞を用いた表現は、当然ながら、受け入れられない文となる。

(19)' \*太郎と百合の花はハンサムだ。

(20)は、(19)と同様に受け入れられない文である。あるいは、これまでの文の中で、もっとも受け入れがたい文であるといえることができるであろう。なぜなら、その根底にあると考えられる2つの文は、いずれも受け入れられない文であるからである。

- (20) a. \*花子はハンサムだ。  
b. \*ルビーの指輪はハンサムだ。

前述のとおり、「ハンサム」という語は、人間、特に、男性について、その特性を述べる場合に用いられる語で、花子とも、ルビーの指輪とも共に用いられることはできない。連結詞を用いた文も、当然、受け入れられない文となる。

(20)' \*花子とルビーの指輪はハンサムだ。

〔Ⅲ〕 以上、比較文についての、いろいろな事実を、英語と日本語の例について検討してきた。ここで、これまで示した事実をもとにして、比較文の成立のための必要にして十分なる条件をまとめてみることにしよう。次の3つの条件が考えられる。

条件〔1〕 比較文の根底にあると考えられる2つの文は受け入れられる文でなければならない。

条件〔2〕 それらの2つの文には、共通の特性、または、共有される特性がなければならない。

条件〔3〕 ある特定言語の使用者、または、ある特定文化（に属する人々）が、対象となる項目の比較、および、条件〔2〕における共通の特性、または、共有される特性の比較を認めるものでなければならない。

条件〔1〕については問題はないように思われる。条件〔2〕〔3〕については、少し説明の必要があるであろう。まず、条件〔2〕については、共通の特性、または、共有される特性が明らかである場合と、明らかでない場合とがあることを述べておく必要があると思われる。この例はすぐあとで示すことにする。条件〔3〕については、「花子は百合の花より美しい」というような文において、花子と百合の花とを比較することは、ふつうであるのか、特殊であるのか、ということや、条件〔2〕の、ある共有される特性が明示的でない場合に、その特性があるかどうかを決める、その判断を与えるための必要な条件であるといわなければならない。

〔Ⅳ〕 以下、これらの条件を具体例を通して検討してゆくことにしよう。次の例についてはどうであろうか。

- (21) The sun is more bright than hot.  
 (22) John is more stupid than ignorant.  
 (23) She is more willing than eager.  
 (24) The table is more decorative than useful.

これらの文には、その根底に次のような2つの文があると考えられ、いずれも正しい文である。

- |                                  |                         |
|----------------------------------|-------------------------|
| (21) a. The sun is bright.       | b. The sun is hot.      |
| (22) a. John is stupid.          | b. John is ignorant.    |
| (23) a. She is willing.          | b. She is eager.        |
| (24) a. The table is decorative. | b. The table is useful. |

したがって、いずれも、比較文の条件〔1〕については適合している。2つの文が共通の特性、または、共有される特性を備えていなければならないという条件〔2〕についてはどうであろうか。まず、(21)においては、その根底にあると考えられる文(a)(b)は、the sun という共通の項目について、それが備えている特性、すなわち brightness と hotness とが比べられている。brightness と hotness とは、表面上、少なくとも、同じ特性ではない。つまり、条件〔2〕に反することになる。にもかかわらず、ここでは、それらが more ~than という比較を表わす形式と共に用いられ、正しい文となっている。これはどのように説明されるのであろうか。

(21)においては、bright が単音節であるため、brighter となるべきところ、more bright

となっていることに注意すべきである。この文を **brighter** を用いて表わすと非文となる。

(25) \*The sun is brighter than hot.

したがって、(21)と(25)にみられる **more~than** と **-er~than** とは区別されなければならないといえる。 (21)については、さらに、次のような言い換えが可能であることに注意しよう。

(21)' The sun is bright rather than hot.

(21)が **brighter** ではなく、**more bright** となっているのは、上述の程度を表わす比較文の形式、**more~than** とは性質がことなることを表わしているといつてよい。**more~than** は、この場合、**rather than** と同義である<sup>4)</sup>。

(22)(23)(24)についても同様に考えられ、それぞれ、次のように言い換えることができる。

(22)' John is stupid rather than ignorant.

(23)' She is willing rather than eager.

(24)' The table is decorative rather than useful.

ところで、(21)について、上で、**brighter** は用いられないということ述べた。が、次のような形式では、**brighter** を用いて表わすことができる。

(26) The sun is brighter than it is hot.

この文では、**The sun is bright. The sun is hot.** という2つの文がその根底にあると考えられ、**brightness** と **hotness** という、ことなる特性の程度が比較されている。そして、**hotness** の度合より、**brightness** の度合のほうが大であることを表わしている文である。この文について、われわれの条件をテストしてみよう。条件〔1〕については、根底にあると考えられる2つの文は、それぞれ正しい文であるため適合している。条件〔2〕についてはどうであろうか。この文では、**hotness** と **brightness** とが比較されており、これらはことなる特性であるように思われる。少なくとも、表面上、明らかに共通であるという特性を、これらの特性の中に見い出すことができない。したがって、表面上は、条件〔2〕に反するといつてよい。前に、条件〔2〕について、ある共有される特性が明示的でない場合に、条件〔3〕がその判断を与えるための必要条件となる、と述べたが、まさにこの場合がそれに相当する。つまり、経験の世界において、この比較文は受け入れられる文であるという事実がある。すなわち、条件〔3〕に適合する文であるという事実から、**The sun** の特性、**hotness** と **brightness** とは、ある面では共有される特性があると理解される。もしそれらが、ある面で共有される特性をもっていなければ、このような比較文は成立しないと考えられるからである。たとえば、上の例(22)(23)(24)を、(26)の形式で表わすと、いずれも、おかしい文となる。

(27) ? John is more stupid than he is ignorant.

(28) ? She is more willing than she is eager.

(29) ? The table is more decorative than it is useful.

(30) ? The boy is taller than he is intelligent.

(31) ? The boy is sicker than he is depraved.



つまり、このような比較は、経験的世界ではなされない。換言すれば、条件〔3〕に反することになる。これらの例において、(27)では *stupid* と *ignorant*, (28)では *willing* と *eager*, (29)では *decorative* と *useful*, (30)では *tall* と *intelligent*, (31)では *sick* と *depraved* は、それぞれ、その程度を比較できる間柄にはないといってよい。すなわち、(26)の文では、*hot* と *bright* との間に、明示的ではないが共有される特性がみられるとすることができるのに対し、これらの間には、その特性が認められないということになる。したがって、条件〔2〕に反することになり、比較文は成立しない。

以上、条件〔3〕に適合すれば、表面上は異なると思われる特性の間にも、共有される特性があることを認めることができるということを述べてきた。

ここで、はじめに示した例文(1)~(8)にもどることにしよう。まず、(1)(2)(3)について考えてみることにする。これらのうち、(1)だけが正しく、(2)(3)は受け入れられない文である。

- (1) The table is longer than it is wide.  
 (2) \*The table is longer than it is short.  
 (3) \*The table is shorter than it is narrow.

これらの文の根底にあると考えられる文は、次のとおり、いずれも受け入れられる文である。

- (1) a. The table is long.                      b. The table is wide.  
 (2) a. The table is long.                      b. The table is short.  
 (3) a. The table is short.                      b. The table is narrow.

したがって、これらは、いずれも比較文の条件〔1〕に適合している。条件〔2〕についてはどうであろうか。共通の特性、または、共有される特性は、(26)の場合と同様に、少なくとも、表面上では、見出しされない。したがって、ここでも条件〔3〕にたよることになると、(1)の文だけが条件〔3〕に適合する。(1)は、あるテーブルの横幅の広さと、そのたての長さとの割合が比較されており、その幅の広さの程度に比べると、たての長さが長いという表現である。このような比較が、経験的世界において、テーブルについてなされることから、換言すれば、条件〔3〕に適合することから、テーブルのたての長さ (*longness*) と横幅の広さ (*wideness*) との間には、明示的ではないが、共有される特性があるということ認めることができる。すなわち、(1)は条件〔1〕〔2〕〔3〕を満たす文、つまり、受け入れられる比較文となっている。一方、(2)は受け入れられない文である。この文では、同一のテーブルのたての長さ (*longness*) と短かさ (*shortness*) が比較されているため、これは自己矛盾をひきおこしている文である。当然のことながら、条件〔2〕〔3〕にも適合しない文となる。(3)の文は、テーブルの横幅の狭さ (*narrowness*) に対して、たての短かさ (*shortness*) が比べられ、その幅の狭さの程度に比べて、たての短かさが短かいというような表現であろう。この文についても、条件〔2〕は明示的ではない。したがって、条件〔3〕にたよることになるが、経験的にこのような比較文は用いられないため、条件〔3〕には適合しないことになる。すなわち、非文である。

(1)(2)(3)の文において、(2)は表現されている内容自体に矛盾があるため、非文となる

のは明白であるが、(1)と(3)に関して、(1)は受け入れられ、(3)は受け入れられないという事実をもう少し説明する必要があるであろう。これまでの説明を要約すれば、(1)の文では、longness と wideness には、明示的ではないが、共有される特性があるということができるのに対し、(3)では、shortness と narrowness には共有される特性がないということになる。そして、その判断は、条件〔3〕が唯一の手がかりとなる。すなわち、(3)が受け入れられないのは、経験的世界で、その表現が認められないという事実が、最も有力な根拠となる。そして、次に示す例文<sup>5)</sup>は、このことを、さらに裏づけることになるであろう。

(32) How  $\left\{ \begin{array}{l} \text{long} \\ \text{wide} \end{array} \right\}$  is it?

(33) \*How  $\left\{ \begin{array}{l} \text{short} \\ \text{narrow} \end{array} \right\}$  is it?

(34) The table is six feet long.

(35) The table is three feet wide.

(36) \*The table is six feet short.

(37) \*The table is three feet narrow.

すなわち、long と wide については、(32)のように、How long (wide) is it? ということができるのに対して、short と narrow については、\*How short (narrow) is it? とは言えない。また、long と wide については、(34)(35)のように言うことができるのに対し、short と narrow については、(36)(37)のように言うことができない。これらの事実は、long と wide に明示的ではないが共有される特性があるということ、一方、short と narrow には、その特性が認められないことを示しているといつてよいように思われる<sup>6)</sup>。ついでながら、narrow と long の間には共有される特性が認められるように思われる。たとえば、次の例は受け入れられる文である。

(38) The table is narrower than it is long.

この文は、おそらく、細長いテーブルについて、そのテーブルは、たての長さ (longness) に比べると横幅が狭すぎるという気持を表わしたものであろう。もう少し幅が広くてもよいのではないかというような気持が含まれているのかもしれない。そして、実際に、このような表現は可能であり、この文は、条件〔1〕〔2〕〔3〕に適合しているといつてよい。

これまで検討してきた(1)(2)(3) および (38)の文については、テーブルという具体的な物の、たての長さ加減と横の広さ加減の程度の比較を表現しているため、それらの文についての経験的世界での判断は、一致しやすいように思われる。おそらく、これらの英語による比較文の内容を日本語で表わした場合も、上で示した判断とほぼ同じ判断が与えられるといつてよいであろう。次にとりあげる(4)(5)(6)(7)(8)は、これらとは、だいぶ事情がことなる。

(4) The man is more unhappy than he is happy.

(5) The man is richer than he is poor.

(6) \*The man is more unhappy than he is poor.

(7) \*The man is happier than he is rich.

## (8) \*The man is poorer than he is rich.

まず、上例にしたがって、これらの文を条件〔1〕について調べてみよう。その根底にあると考えられる2つの文は、次のとおり、いずれも受け入れられる文である。

- |                            |                      |
|----------------------------|----------------------|
| (4) a. The man is unhappy. | b. The man is happy. |
| (5) a. The man is rich.    | b. The man is poor.  |
| (6) a. The man is unhappy. | b. The man is poor.  |
| (7) a. The man is happy.   | b. The man is rich.  |
| (8) a. The man is poor.    | b. The man is rich.  |

したがって、いずれも条件〔1〕には適合している文である。条件〔2〕〔3〕についてはどうであろうか。自国語話者の判断によれば、(4)(5)だけが特殊な場合に受け入れられるが、他の文は受け入れられないという。したがって、ここでも、(4)(5)が受け入れられる文であるということから、すなわち、条件〔3〕に適合すると考えられることから、(4)(5)の根底にあると考えられる2つの文には、共有される特性があると考えられることになる。すなわち、(4)では、unhappiness と happiness との間に、(5)では、richness と poorness との間に共有される特性が認められることになる。そして、(4)の文は、ある特定の人について、その人は、happy である度合より unhappy である度合のほうが大であるという意味に、(5)の文は、poor である度合より rich である度合のほうが大であるという意味に、それぞれ、解釈されるであろう。

一方、(6)(7)(8)は受け入れられない文である。(6)は、ある特定の人について、poor である度合より、unhappy である度合のほうが大であることを表わしていると考えられ、(7)は、rich である度合より happy である度合のほうが大であることを表わしている文であるといつてよいであろう。(4)(5)の文が受け入れられるのなら、(6)(7)の文も受け入れられてもよいのではないかという疑問が生ずるのである。また、(8)は、いったいなぜ受け入れられない文であるのか。

ここで、同じ内容を日本語で表わし、日本人であるわれわれは、これらの文を受け入れるかどうか調べてみることにしよう。

- (4)' その人は、しあわせというよりふしあわせだ。  
 (5)' その人は、貧乏というより金持ちだ。  
 (6)'? その人は、貧乏というよりふしあわせだ。  
 (7)'? その人は、金持ちというよりしあわせだ。  
 (8)'? その人は、金持ちというより貧乏だ。

(4)')(5)')の文は、ふつうに用いられる文であるように思われるが、(6)')(7)')(8)')については、どのような場面で用いられるのか、すぐには思いあたらない。(8)')は(5)')の逆の状態を表わす文であるけれども、実際の場面では、このような表現を用いることはあまりないように思われる。おそらく、金持ちであるというプラスの面は強調されても、貧乏であるというマイナスの面を強調することは楽しくないためであろう。(6)')については、「貧乏」と「ふしあわせ」とが比較されているが、実際の場面でこの表現が自然に用いられている状態が思い出されないであろう。(7)')についても、(6)')と同様に「金持ち」と「しあ

せ」とが比べられている場面に思いあたらないであろう。このような理由で、これらの文はおかしな文に思われる。しかしながら、ある特殊な場面でなら、(6)′(7)′(8)′の文も、用いられることがありうるように思われる。したがって、これらの happy, rich, poor, unhappy などの抽象的な概念についての比較文は、その脈絡によって、用いられるか否かが決まってくるというよいであろう。これらの比較文は、文化的社会的脈絡によって、受け入れられか否かが決まることとなる。つまり、(4)(5)(6)(7)(8)の文については、それぞれの文の根底にあると考えられる2つの文に、共有される特性があるかどうかは、その比較文が用いられる脈絡によって決まってくる。たとえば、ある特殊な場面(8)の文が用いられたとしたなら、その文は、比較文の条件〔3〕に適合することになり、したがって、その根底にあると考えられる2つの文には、共有される特性が認められることになる。すなわち、受け入れられる比較文となる。

〔V〕 以上、最近の言語理論の知識を借り用いて、比較文の成立のための条件について、意味の面から検討してきたことになる。ここで提示された比較文の3つの条件は、比較文を構成する際、かなり有益な資料を提供するものと思われる。(1973年11月1日)

#### 注

1. 本稿は、拙稿「英語比較構文について」長崎大学教育学部人文科学研究報告第22集(昭和48年)においてとりあげた比較構文を、さらに、視点をかえて考えなおしたものである。前述の論文では、主として、統語論の立場から、比較構文の特性について論ずることを試みた。ここでは、意味の面から比較文の特性を考えてみることにした。
2. Bruce Fraser, 'An Analysis of "Even" in English,' *Studies in Linguistic Semantics*.
3. この部分は、長崎大学教授、愛宕八郎康隆の助言に負っている。
4. Carlota S. Smith (1961) および、James D. McCawley (1973) を参照。
5. Austin Hale (1970) を参照。
6. 拙稿「英語比較構文について」において、long と wide には [+dimension], short と narrow には [-dimension] という特性素を与えることができることを示した。このように考えれば、long と wide には [+dimension] という共通の特性が認められ、同時に、short と narrow にも [-dimension] という共通の特性が認められることになる。しかし、ここでは、共通の特性、共有される特性を、経験的世界での用いられかたを判断の基準として、考える立場をとるため、前述の論文とは判断が異なっていることをことわっておく。

#### 参 考 書 目

- Fraser, Bruce (1971) 'An Analysis of "Even.. in English.' *Studies in Linguistic Semantics*, ed. by Charles J. Fillmore and D. Terence Langendoen. pp. 150~178. Holt Rinehart Winston.
- Hale, Austin (1970) 'Conditions on English Comparative Clause Pairings,' *Readings in English Transformational Grammar*. ed. by Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum, pp. 30~55. KANTO BOOKS Co., LTD. Tokyo.
- McCawley, James D. (1973) 'Quantitative and Qualitative Comparison in English,' *Grammar and Meaning*. pp. 1~14. Taishukan Publishing Company.

- Michaels, David (1970) . 'Two problems in Description of Adjectives.' *Language Learning*, Vol. XX. No.1. pp.89~101.
- Lees, Robert (1961) . 'Grammatical Analysis of the English Comparative Construction.' *Word*, 17, pp.171~185.
- Smith, Carlota S. (1961) . 'A Class of Complex modifiers in English' *Language*, Vol.37, No.3, pp.342~365.

※ 本稿執筆に際し、東京学芸大学助教授、中右実氏、および、長崎大学助教授、愛宕八郎康隆氏に有益な助言をいただいた。また、長崎大学外人教師、W.カーライル氏には、例文の一部を検討していただいた。これらのかたがたに、心からお礼を申しあげる。

※ 本稿は、同じ題目“Conditions on Comparatives” で、福岡言語学研究会（1973年12月9日）において口頭発表されたことをことわっておく。